

【講演会等報告】

講演会・コンサート「講演と唄の夕べ：サハリン先住民言語を伝え、残す」

山田祥子

開催日：2009年6月2日（火） 18：30～20：00

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：エレナ A. ビビコワ（ウイльта語伝承者）

イリーナ Ja. フェジャエワ（ウイльта語伝承者）

クラウディア E. マチェヒーナ（エヴェンキ語伝承者）

主催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道民族学会

3名の演者は、ウイльтаの口頭文芸ニグマー（語り物）の分析協力のため、約1週間の日程で来道された*。それに先立ち、筆者が同年3月にノグリキでビビコワ氏と打ち合わせの際、分析作業のほかに滞在中やりたいこととして氏から真っ先に出たのが「コンサート」であった。こうしてゲスト自身による希望に端を発し、講演会（講演の部）とコンサート（唄の部）を組み合わせた二部構成で企画され実現したのが、今回の催しである。ロシア語から日本語への通訳は永山ゆかり氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員）が務めてくださった。

ウイльтаは、おもにサハリン島の中部から北部に居住する民族で、2002年の統計では総人口346人と数えられた（FSGS 2004）。ニヴフやアイヌなどといった諸民族と接触してきたが、近代以降はロシアや日本という二つの国家勢力の影響を強く受けている。一方、エヴェンキは、シベリア、モンゴル、中国など大陸の広い範囲に分布する民族で、ロシア国内では総人口35,527人（2002年現在；FSGS 2004）を数えるが、サハリン島に居住するのはそのごく一部である。SEIC（2006: 13）によると、彼らが大陸からサハリンに移住して来たのは19世紀末のことで、2005年現在サハリン州におけるエヴェンキの人口は266人だという。

ビビコワ氏も講演のなかで言及したように、ウイльтаとエヴェンキは言語系統が同じで、伝統の生活様式にも似たところが多い。そうした系統的類似を背景に、たとえサハリンにおける接触期間は短くとも、互いに親しい関係を築いてきたと考えられる（SEIC 2006: 13も参照）。今回のコンサートでも、ウイльта語話者のビビコワ氏・フェジャエワ氏が流暢なエヴェンキ語で歌う場面もあり、ウイльтаがエヴェンキの歌謡を共有してきたことは明らかである。

また、冒頭に述べた口頭文芸ニグマーの録音は、かつてサハリンから北海道へ移住したウイльта女性から池上二良氏（現、北海道大学名誉教授）が採録したものであるが、その内容にエヴェンキ語（に似たことば）で節をつけて謡う部分が多く含まれている点が注目されている。この特徴から、このジャンルは二つの民族の交流によってエヴェンキからウイльтаに取り入れられたのだろうと推測される（池上1984, 2001も参照）。もともと、これらの歌謡や口頭文芸が、いつ頃どこでどのように成立したかは不明であり、今後の研究に期待される場所である。

しかしながら、今日ではいずれの民族も伝統的な生活や文化を失いつつあり、日常的にはロシア語しか話さない。そのため言語・文化の伝承者は減少し、2002年の統計ではウイльта語の話し手はわずか64人とされた（FSGS 2004）。サハリンにおけるエヴェンキ語の話し手の

数は明らかではない。こうした状況のなか、これらの言語の希少な伝承者である3人が北海道札幌の地でともに壇上に立ち、講演とともに伝統の唄や踊りを披露してくださったのは、後にも先にも非常に得がたい機会であった。

以下では、講演録、および来場者アンケートで寄せられた声とともに《講演の部》《唄の部》の順に報告する。

《講演の部》

3名を代表してビビコワ氏からお話をいただいた。ビビコワ氏は、池上教授やフェジャエワ氏とともにウイлта語文字教本 (Ikegami et al. 2008) の編者であり、現在ウイлта語教育に尽力する一人である。この講演では、近隣民族との交流の歴史、文字教本 (Ikegami et al. 2008) 作成における苦労や成果、そして今後のウイлта語教育における課題などを情感豊かに語られた。なお、文字教本 (Ikegami et al. 2008) については本誌前号で笹倉 (2009) が紹介している。この講演について来場者アンケートで寄せられたコメントをいくつか紹介したい。

「教科書を出版する際の苦労話が興味をひかれた」(20代男性)

「研究者と被研究対象の実情がわかった」(50～60代男性)

「ロシアの先住民政策の実態がわかった」(50～60代男性)

「サハリンの石油会社が土地利用をして、先住民に金銭給与をしているのは興味深い」
(50～60代男性)

「言語に関しては、幼少期からの教育が必要であると強く感じる。子どもをとりまく周囲の大人も同時に言語を学び、家庭での会話に取り入れると効果的ではないか」(20代女性)

これらのコメントからわかるように、ビビコワ氏のお話は、来場者一人ひとりが研究者や施政者の見解や成果とはまた異なる「先住民」からの視点に触れ、先住民言語の伝承や保存について主体的に考える機会を与えてくれた。

以下は、その講演録である。ここではロシア語によるビビコワ氏の講演の日本語訳のみ掲載する。原則として永山氏による通訳にもとづくが、当日の録音を聞きなおして筆者が一部改訂を加えた。訳文の責任は、あくまでも筆者にある。なお、〈 〉で示す小見出し、および文中の () は筆者が補足したものである。

講演録

〈ウイлтаと近隣民族との関係〉

ウイлтаの一つの伝説をご紹介します。今日もウイлтаが住んでいるヴァル川のそばに、ウイлтаの一家が住んでいました。ある天気の良い日、(湾の向こうから) 人の声と犬の吠える声が聞こえてきました。声を聞いた人たちは、湾の向こうに行き誰がそこに住み着いたのかを見に行きました。そして湾をぐるっと回って向こう岸に行ってみると、小さな小屋があるのが見えました。それは、ニヴフの一家でした。彼らは互いに交流して親しくなり、ニヴフの人たちはウイлтаの人たちをもてなしました。その時、彼らは話し合いをして、ニヴフの人たちは海辺に住み、ウイлтаの人たちはもう少し奥地の陸地に住むということを決めました。そしてそのニヴフとウイлтаの間ではいさかいがないように、という取り決めを交わし

ました。

そしてそれ以降、長い年月、ウイлтаとニヴフは近くに住んできました。北東の海岸部にはニヴフが、タイガや内陸部のほうにはトナカイ飼育民であるウイлтаが住んでいます。そして歴史を紐解いてみても、過去にこれまでにニヴフの人たちとウイлтаの人たちがいさかいを起こしたという記録は残っていないと思います。——もともと、ウイлтаの氏族の間では小さいいさかいが起こることがあります。たとえば、女性や、良い土地、トナカイをめぐる、などです。——ウイлтаの人たちとニヴフの人たちは、近くに住みながら、今でも仲良く友好的に暮らしています。

1920年代に、——（住み分けをして）友好的に暮らしていたというのは私たちの親の世代までで、——今度はソ連の行政単位としての村ができ、ウイлтаもニヴフもロシア人も一緒に暮らしました。そこで文盲のウイлтаは集められ、ロシア語やロシア民族の文化を教わりながら生活しました。私たち（子どもたち）は学校でロシア語を学びましたが、寄宿舎では互いにそれぞれの言語で会話をしました。（通訳補足：ウイлтаの人はニヴフ語を理解することができますし、ニヴフの人もウイлта語を理解することができました。）

（通訳補足：ウイлта語とニヴフ語は系統が違うのですけれども、）このような経緯があるために多くの共通の単語があります。基本的な単語でも、たとえば「年」という意味でウイлта語では“anani”、ニヴフ語では“ani”といいます。「幸せ」という意味でウイлта語では“kəsi”、ニヴフ語では“kas”といいます。「波」を意味するウイлта語“laata”も、ニヴフ語の“lar”、“laf”とよく似ています。このようにニヴフ語とウイлта語では語幹の部分（通訳補足：単語の中心の部分）が共通していることが多いです。

このほかにエヴェンキという民族がいます。エヴェンキは他の民族より遅れて18世紀（筆者注：上述のSEIC（2006: 13）などでは19世紀末といわれる）にサハリンにやってきた民族です。彼らはウイлтаと同じ系統の民族で、生活様式も言語も似ています。ウイлтаと同じようにトナカイを飼いタイガに暮らすという生活を送っていました。

ロシア人がサハリンに来たのは20世紀の初頭になってからです。あるロシア人でエヴェンキの女性と結婚した人がいて、その後、ウイлтаの人たちとも結婚を繰り返し、非常に親しく暮らしていたということがあります。ロシア人はサハリンの先住民に近代文化をもたらしたということで、その点についてはもちろん感謝しています。けれども、その代わりに私たちは自分たちの伝統文化から遠く離れてしまいました。

〈文化の保存・伝承活動の始まり〉

私自身のことを例にしますと、私はロシア語の教師であり、ロシアの村でロシアの子どもたちにロシア語を教えていました。このように私は何の疑問も持たずにロシアの文化のなかで暮らしていたわけですが、1980年代になって自分自身の民族ということについて初めて意識しはじめました。その当時コルホーズで民族問題というのが議題にのぼり、その時に初めてそういう問題があることを意識しました。

1980年代末に、皆さんもご存知だと思いますが、ゴルバチョフの時代になって大きな転換がありました。ゴルバチョフはそれまでであった厳しい対外関係を友好的なものに変えました。そして1990年になって、私たちの住むノグリキ地方に外国人の言語調査の一団が初めてやって来ました。それは、当時横浜国立大学の教授であった村崎恭子先生を代表とする、サハリンにおける少数民族の言語の調査をするグループでした。その時に、その調査団の一員で現在北海道大学名誉教授である池上二良先生と初めて知り合いました。

その時私は北方民族文化のインストラクターとして働いており、その調査団をノグリキよりもさらに北のヴァルという小さな村に連れて行きました。そこには今回一緒に来ているイリーナ・フェジャエワさんが住んでいます。その時、私たちは非常に驚きました。私たちの言語を、まったく関係のない人たちが研究しているということを初めて知ったからです。そして池上先生と出会ったおかげで、私たちは自分たちの文化や自分たちの言語をまったく新しい視点から見るようになりました。



講演の部：ビビコワ氏による講演の様子

それから私たちは大きな喜びをもってウイльта語の文字教本を作るというプロジェクトに参加し、ウイльта語の話者としての立場から池上先生をいろいろお手伝いするようになりました。

〈ウイльта語を書き表すために：文字の考案と策定〉

ウイльта語は大きく、北部方言と南部方言に分かれています。文字教本作成のプロジェクトでは、南部方言から二人の女性、北部方言から二人の女性、合わせて4人の女性が加わっていました。

私たちは口語としてのウイльта語はよく知っているのですが、書き言葉としてのウイльта語というのは初めて見るものでした。池上先生と知り合ってからのはじめの何年かは、私たちにとって「文法を考える」という非常に重要な問題を抱えた時期でした。まず、文字を考えるにしてもラテン文字を採用すべきなのか、キリル文字を採用すべきなのか、多くの議論を重ねました。池上先生のこれまでの著作は、ほとんどがラテン文字で書かれたものでした。しかし、私たちが現在ロシアに暮らしているということ、子どもたちはロシア語で、つまりキリル文字に親しんでいます。そのことから私たちは、池上先生が提案したいくつかのラテン文字も取り入れましたが、キリル文字を基本とした書き方を考案しました。それから、ここにいらっしゃいますイリーナ・フェジャエワさん、当時ユジノサハリンスクの少数民族課の主任であったナデージュダ・ライグンさん、池上先生が、私たちが考えたウイльта語の文字をもってモスクワの文部省のところに行きました。

〈ウイльта語文字教本の編集とさまざまな協力者〉

こうして文字が採択された後も、私たちは池上先生が年に一度ロシア（サハリン）にいらっしゃるたびに、ウイльта語の語彙や、文字教本にどのような内容を盛り込むかという問題について、議論を重ねていきました。ただ、池上先生はそれほどロシア語がお上手ではなく、私たちも日本語はまったくわからないので、作業は非常に難航しました。こうして、私たちの作業を助けるために、英語を少しでも知っている人や、ウイльта語と英語を知っている人、英語とロシア語を知っている人などさまざまな人たちがさまざまなかたちで、私たちの文字教本を作るという作業に協力してくれました。ある年は以前北海道大学にいらっしゃった井上統一先生（現在、関西外国語大学教授）、ほか東京外国語大学の風間伸次郎先生（通訳補足：ツングース系の言語を研究している研究者です）、それから永山ゆかりさん、英語に堪能なタチアナ・ローンさん（通訳補足：この方はサハリン州立郷土博物館の館長です）など、いろいろな

方が手伝ってくれました。

一・二年生向けの単なる語彙ですとか、そういうことはそう難しくはないのですけれども、もう少し上の学年向けの文法の細かなことについては、いろいろ難しい問題があります。ロシア人のロシア語教師たちは、この私たちの作業を見て笑いました。彼らは、「事はそんなに難しくはない。どんなものでもいいからロシア語の文字教本をとって、それをウイльта語に翻訳すれば、もうそれで文字教本が出来上がるのだから。何をそんなに苦労しているのか」と言うのです。けれども、池上先生は非常に熱心な、またまじめな方で、この文字教本のなかに悪い言葉が入ることを非常に嫌いました。つまり、「けんか」とかそういったネガティブな意味をもつ言葉をこの教本のなかに入れることを許してくれませんでした。私が最後にこの文字教本の手稿を持ってきたとき、池上先生はまたしてもそこに望ましくない言葉を見つけてしまったのですけれども、その時はもう出版までの時間も迫っていたことだし「まあ、良いでしょう」とどうにか見逃してくれました。

〈ウイльта語文字教本の出版にいたるまで〉

このようにして 2003 年になり、初めてこの文字教本の第一稿が出来上がったので、私はそれをすぐにタチアナ・ローンさんに渡しました。ローンさんはウイльта語の話者ではないのですけれども、この文字教本作成の作業をすべてオーガナイズし、いろいろな面で協力してくださったので、著者の一人に加わっています。私たちは、ウイльта語の教本なのでウイльта人の画家に挿絵を描いてほしかったのですけれども、時間が迫っていたこともあり、少しでも早く原稿を出版社に渡せば少しでも早く出版されるに違いないと期待して、どのような画家に挿絵を描かせるかは出版社の判断にゆだねることにしました。

ところが、そうこうしているうちにインフレが始まり、出版の資金が足りなくなっていました。出版社の社長も何度か替わり、私たちはどうしたら出版を実現させることができるのかまったくわからずに途方にくれていました。その時、私とフェジャエワさんは二人で考えて、サハリンの大きな石油会社であるサハリンエナジー社に手紙を書こうと思い立ちました。そこにローンさんも加わって、ともにサハリンエナジー社宛てに手紙を書いたのですけれども、はじめは何の答えもありませんでした。その時に手伝ってくれたのが、リュドミーラ・ミソノワさん（ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所上級研究員）という研究者です。そのミソノワさんというのはモスクワから来た文化人類学者なのですが、ウイльтаの調査を長くしていたこともあり、サハリンからモスクワに戻ってからサハリンのさまざまな関係部署、——先ほど申し上げたサハリンエナジー社、サハリン州議会など——に手紙を書いてくれました。

その後半年くらい手紙のやり取りが続いていたのですが、そうしてからようやく肯定的な答えをもらうことができました。肯定的な答えをくれたのは、私たちがはじめに手紙を書いたサハリンエナジー社でした。こうして 2008 年になって、ようやく文字教本を出版することができました。最初は 300 部と言っていたのですが、その後増やして 500 部印刷することができました。このようにしてようやく文字教本が出版され、昨年（2008 年）出版記念会を開くことができました。

〈文字教本の活用と教育の課題〉

文字教本が出版されたあと持ち上がってきたのは、その文字教本をどのように活用していくかという問題です。ウイльтаは北部ではヴァル、南部ではポロナイスクの二つの地方に住んでいるのですけれども、まずこのポロナイスクのほうでは初等（一・二年生）のクラスで週に 2 時間、年長の学年で週に 3 時間、合計で週に 5 時間の授業があります。ヴァルでは、幼稚園

でウイльта語を教えています。週に6時間、——ここではウイльта語だけではなくて、ウイльтаの伝統工芸についても教えます。これはイリーナ・フェジャエワさんが行っています。

ヴァルの小学校では、はじめは小学校でウイльта語の授業をすることに否定的な考えをもっていたのですが、最近ようやく肯定的なほうに意見が変わってきました。しかし、残念ながら今のところヴァルの小学校にはウイльта語を教えられる教師がおりません。他にもまだウイльта語の教授の方法はあって、子どもの習い事をするセンターがヴァルにあるのですが、そこで補習授業としてウイльта語を教えることもできると思います。しかし、ここでもまた教師がおりません。

このウイльта語の文字教本が出版されたことで、ヴァルの教育関係者の間で急に言語への興味というものを持ち上がってきたようです。そして、ウイльта語だけではなく、ニヴフ語の教育も行おうという動きも出てきました。たとえば、実験的に教室を開いて、そこに教員免許を持っているわけではないけれどウイльта語なりニヴフ語なりを流暢に話すことができる人たちを呼んで、その言語を聞こうという試みもあります。しかしまだ私たちには文字教本があるばかりで、教育法ですとかシラバスですとか視聴覚教材をどのように作っていくかということはまだ決まっていません。これらを今後考えていく必要があります。

また、まだ計画段階なのですが、家庭でどのように民族の言語を教えるか、たとえばサマースクールのようなものを開けないかといったことが議論されています。私は現在ノグリキに住んでいるのですが、ノグリキには30人ほどのウイльтаがいます。そして今、自宅のなかに一室、ウイльта語教室用の部屋をつくって、そこで子どもたちにウイльта語を教えたいと考えています。

このように、苦勞してつくった文字教本を使って、私たち大人も含めて、いろいろな人たちにウイльта語を教えていきたいと思っています。ご清聴どうもありがとうございました。

《唄の部》

後半の唄の部では、3名の演者がウイльта語、エヴェンキ語、ロシア語などによる10曲を披露した。(以下の題目は、演者の説明にもとづく。)

1. 「ソロジェー」(ウイльта語)
2. 「エヴェンキ語のご挨拶」(エヴェンキ語)
3. 「春」(エヴェンキ語)
4. 「マウリ(くま祭りのうた)」(ウイльта語)
5. 「混成曲」(ロシア語)
6. 「何も無い野原」(ロシア語)
7. 「オソロイ(輪の踊り)」(エヴェンキ語)
8. 「わがふるさと」(ロシア語・ウイльта語・日本語)
9. 「ベリー摘みのうた」(ウイльта語)
10. 「鶴のうた」(エヴェンキ語)

演者はそれぞれ民族衣装に身を包み、たとえば4ではウイльтаの伝統の楽器ヨードプを手にして歌い踊るなどのパフォーマンスも盛り込まれ、会場からは拍手と歓声が上がった。

ウイльтаやエヴェンキの歌謡とともに来場者を印象づけたのは、演者が「私たちはロシア



唄の部：(左から) 永山ゆかり氏 (通訳)、山田 (筆者)、I. Ja. フェジャエワ氏、E. A. ビビコワ氏、K. F. マチェヒーナ氏

で生きているので、ロシア語も私たちのことばです」と述べ、ロシアの歌謡も演じたことだった(下記の来場者コメントも参照)。講演の部でも述べられたように、彼らが伝統の言語・文化を残す重要性を強く意識しつつも、ロシア語・ロシア文化を敬う気持ちをもっていることがわける場面であった。また、8はロシア語の歌謡曲をビビコワ氏がウイльта語に訳し、筆者(山田)による日本語訳もつけて、三つの言語で合唱した(左の写真はその時のようす)。訪問地である日本への親愛と友好の気持ちがこもった一曲であったと感じる。

来場者アンケートでは、次のようなコメントが寄せられた。

「衣装も大変素敵でした」(20代女性)

『ロシア語も私たちの大切なことばです』ということばに、はっとさせられた」(20代男性)

「唄の意味はわからなかったが、今まで聞いたことのないメロディーや声を聞くことができ、大変良いひとときを過ごすことができた」(20代女性)

「伝統的な生活の方法についての説明があると、講演も唄もさらに実感あるものになったと思う」(50~60代男性)

コメントにもあるように、歌詞の意味や文化的背景についての説明が少なかったことが、企画者側としての反省点である。

なお、上記の曲目9については、本誌の研究ノートに荒山千恵氏との共著により五線譜・解説付で掲載しているので、そちらも参照されたい。

まとめに代えて

まず、演者のE. A. ビビコワ氏、I. Ja. フェジャエワ氏、K. F. マチェヒーナ氏に、記して感謝申し上げたい。3氏とも来道前から入念に準備し、滞在中も過密なスケジュールのなかで練習を重ねて、本番に臨まれた。その講演・演技には、池上教授をはじめとしてサハリン先住民の研究に関わってきた日本の研究者への敬愛と、会場に集った私たちへの深い親しみの態度が表わされていたように思う。また、この催しだけでなく3氏の滞在期間をとおして、通訳として多大なお力添えをくださった永山ゆかり氏にも、心から感謝の意を表したい。本報告も、同氏の通訳に拠るところが大きい。

なお、3氏はこの催しの後、北海道立北方民族博物館(網走市)やアイヌ民族博物館(白老町)などを訪れ、市民交流や展示視察などを行われた。これからも、研究者だけでなくサハリンと北海道の市民を巻き込んだ、親しい交流の機会が増えることを期待する。

註

* 3名の招聘は、文部科学省科学技術研究費補助金基盤(B)「ツングース系危機言語のテキスト・コーパス作成」(課題番号 18320061 [代表: 津曲敏郎])による事業の一環として行われたものである。

参考文献

池上二良

1984 「カラフトのウイльта族の英雄物語とその伝来」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4, 東京外国語大学 [池上 2001: 213-221 に再掲].

2001 『ツングース語研究』汲古書院.

笹倉いる美

2009 「【書評・紹介】池上二良ほか編『ウイльта語を話しましょう』」『北海道民族学』5: 30-33.

Federal'naja sluzhba gosudarstvennoi statistiki (略 FSGS)

2004 “Vserossiiskaja perepis' naselenija 2002 goda”. <http://www.perepis2002.ru> (2010年1月18日閲覧)

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva

2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'inski*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.

Sakhalin Energy Investment Company Ltd. (略 SEIC)

2006 *Sakhalin indigenous minorities development plan*.

(やまだ・よしこ／北海道大学大学院文学研究科 博士課程)